

# 長期搾乳が必要となった母親が入院中から退院後にかけて経験する搾乳への思い

キーワード：母児分離、長期搾乳、支援

佐々木 瑛里（東入院棟5階）

## I. はじめに

近年、産科医療の発展に伴い低出生体重児の出生が増加している。母乳で子どもを育てることは栄養・免疫面だけではなく発達心理面からも利点があることが明らかとなっている<sup>1)</sup>。身体機能が未熟な早産児こそ母乳で育てることが望ましい<sup>2)</sup>とされているが、新生児室入院により母児分離状態となることで母乳育児は困難となる。そこで、搾乳による母乳育児を支援していく必要がある。500ml/日以上 of 搾乳を行う事で母乳分泌維持につながる<sup>1)</sup>といわれているが、母親は身体的・精神的負担を抱えながら搾乳を継続することに様々な悩みを抱く<sup>3)</sup>。そこで本研究は、長期的に搾乳継続する母親が抱く入院中から退院後にかけての心理明らかにすることで支援の方向性について示唆することを目的とする。

## II. 用語の定義：

長期搾乳：母児分離状態となったことにより母親が退院後も継続的な搾乳を必要とする場合を長期搾乳とする。

## III. 倫理的配慮

対象者に対し、研究への参加は任意であり辞退しても不利益は生じないことを伝えた。またデータから個人を特定されないよう配慮した。

## IV. 研究方法

1. 研究デザイン：事例研究、質的内容分析
2. 研究期間：平成27年7月～11月
3. 対象者：当院で出産した母親の中で、児の在胎週数が35週未満または出生時体重が2300g以下であり新生児室へ入院となった児の母親3名を対象とした。

	帝王切開適応	在胎週数	出生体重	児入院期間
A	前期破水・分娩停止	34週1日	1790g	29日
B	常位胎盤早期剥離疑い, NRFS	34週1日	2055g	23日
C	前期破水・分娩停止	35週4日	2178g	17日

※Cは手術目的で大学病院へ搬送となった

## 4. データ収集方法

対象者の入院中・退院後1週間前後の2回、プライバシーの確保できる個室で半構成的面接を行った。

## 5. 分析方法

インタビュー内容から搾乳への思いに関するものを意味ごとに区切ったものをコードとした。対象者各々のコードにおいて類似性と相違点を考察し、まとまりをつくったものをサブカテゴリとした。3人のサブカテゴリを集約しその中で再度類似性と相違点を考慮しまとまりをつくったものをカテゴリとした。

## V. 結果

コードを「」、サブカテゴリを<>、カテゴリを【】で示す。入院中のインタビューから得られたカテゴリを1に、退院後のインタビューから得られたカテゴリを2に示す。カテゴリ化までの詳細な過程は別紙1に示す。

### 1. 入院中

21個のサブカテゴリを集約し9個のカテゴリに分類された。

<児が傍にいないことを寂しく思う><申し訳なく思う>などの語りから【児が入院したことに罪悪感・寂しさを感じる】というカテゴリを抽出した。また「お産がとにかく大変だった」「身体はまだきつい」という語りから【分娩が大変だったと振り返り、まだ体調が万全ではないと感じる】とした。「母乳で育てると強くなるって聞いた」「とにかくいいと思う」等から【母乳の利点を意識する】とした。「出始めたからやりがいが出てきました」等から【母乳分泌量増加を実感しやりがいを感じる】とした。「毎日飲む量が増えている」「足の力も強くなってきて」などから【児が元気にしている様子を見たり哺乳量が増加していることが励みになる】とした。「とりあえずあげないかんと思う」等から【児の哺乳量に見合う搾乳をとどけなければならないという使命感】とし、<自分なりの方法で楽に搾乳出来る方法の模索する><入院中に使用した搾乳器の中から自分の使いやすい搾乳器を選び、購入の参考にする>

等のから【よりよい搾乳方法を模索する】とした。さらに＜同室者へ初めは遠慮するが仲良くなり搾乳を応援してくれたことが搾乳の原動力となる＞＜夫が児に没頭し搾乳に興味を持つ＞などを集約し【周囲の存在が搾乳への原動力となる】とした。＜退院後の搾乳へ意欲的である＞＜どのように生活リズムの中に取り入れていくか考える＞等から【退院後の搾乳について思いをめぐらせる】とした。

## 2. 退院後

22個のサブカテゴリを集約し8個のカテゴリに分類された。

「出なくなってきた」「ちょっとずつでも搾乳と思う」等を【乳房の張りや乳汁分泌量の変化を感じ取り対処しようとする】と集約した。＜搾乳という行為による身体的疲労＞＜よい搾乳器を購入するための経済的負担＞等から【搾乳という行為を継続することで生じる身体的・経済的負担】と集約した。また＜夜間搾乳をした方が良くと思いつつも寝てしまう＞等から【母乳継続に良い事をしようとするが継続が難しく、出来ていないことに罪悪感を感じる】とした。「赤ちゃんが戻ってきてもこんなだったらどうしよう」等から【搾乳に自信が持てず児が退院した後の授乳を不安に思う】とした。「飲めてると頑張れる」「8パックは持っていくことを目標としている」等から【児に母乳を飲んでもらいたいという気持ちがあり、児の哺乳量に見合う搾乳量となるよう努力する】とした。＜乳房の張りを感じ搾乳をしなければと思う＞＜外出時に時間を気にする＞を集約し【搾乳中心の生活となる】とした。「実家なのでゆっくりしてます」「搾乳していても（乳房を周囲から見えないように）隠してやりなさいとか言われますね」等から【家族からの支援があることをありがたく思う一方で気を使う面もある】とした。＜入院中に助産師から搾乳分泌のために良いと言われたことを退院後も継続する＞＜NICUで児と触れ合ったり児を見ながら搾乳することが励みになる＞等から【搾乳量減少への対処として、NICUで児と接触したり、産科入院中に助産師に助言されたことを思い出し実践する】とした。

## VI. 考察

入院中から退院後にかけて経験する思いについて、特徴的な結果をふまえ支援の方向性について考察する。

### 1. 入院中に経験する思いと支援

入院中には【児が入院したことに罪悪感・寂しさを感じ】たり【分娩が大変だったと振り返り、まだ体調が万全ではないと感じる】など搾乳に対してすぐに気持ちが向かっていなかった。しかし徐々に【母乳の利点を意識】し【母乳分泌量増加を実感すること】や【児が元気になっている様子を見たり哺乳量が増加していること】【周囲の存在】等が励みとなり【児の哺乳量に見合う搾乳をとどけなければならないという使命感】を感じ、搾乳を行うことにつながっていた。これらの思いについては、高橋ら<sup>6)</sup>の研究結果と類似していた。一方【退院後の生活について思いをめぐらせる】というカテゴリは先行文献と比較し本研究に特徴的であった。このカテゴリは＜退院後の搾乳へ意欲的である＞＜退院後にどのような搾乳方法を選択するか考える＞＜どのように生活リズムの中に取り入れていくか考える＞等のサブカテゴリから集約された。このことから、退院後に母親自身で搾乳を行うことに対して漠然とした不安を抱え、思いを巡らせていたのではないかと考える。

緊急帝王切開や児の入院など正常妊産婦と比較して劇的な経験をしている母親に対して、出産までの過程をゆっくりと振り返る時間をとること、体調をねぎらいながら搾乳に向けて前向きに気持ちを整理することを支援していく必要があると考える。さらに、なるべく早い段階から搾乳器・母乳パックなどの情報提供を行い、退院後の生活について具体的に想像できるような援助が重要と考える。

### 2. 退院後に経験する思いと支援

【児を母乳で育てているということが自信につながる】ケースと、搾乳量が減少していることで【搾乳に自信が持てず児が退院した後の授乳を不安に思う】ケースがあり、長期搾乳は育児に対する自信にも不安要素にもなり得ることが分かった。高橋ら<sup>6)</sup>が、搾乳を「栄養のため」ととらえることで搾乳継続が苦痛とならないよう、母児の“つながり”を意識できるような関わりが必要であると述べているように、児の事を思い搾乳を続けている努力を認める姿勢が重要である。搾乳量だけで評価せず搾乳という行為に対する努力を認め自信がつくよう支援する。

### 3. 入院中から退院後にかけて経験する思いと支援

入院中・退院後の思いにおいて【児が元気になっている様子を見たり哺乳量が増加していることが励みになる】【児に母乳を飲んでもらいたいという気持ちがあり、児の哺乳量に見合う搾乳量となるよう努力する】という類似した2つのカテゴリが得られた。児の状態が良くなることや哺乳量が増加することが搾乳をはじめていく上での原動力となり、また搾乳を継続していく上での目標でもあることが分かった。母親が児の成長を実感し表出できるような関わりが、搾乳への動機づけにつながると考える。

またC氏の「赤ちゃんの話をすることが多いので搾乳に関する相談はあまりしないですね」という語りから児の状態が話題の中心となり搾乳に関する悩みを表出できる場が少ないことが示唆された。江南ら<sup>4)</sup>や大山<sup>9)</sup>からも母親の抱える孤独について同様に述べている。このことから母親が相談できる場が途絶えることのないよう、産科・小児科スタッフ間で児の状態・母親の思い・搾乳状況に関する情報共有を密に行うことが重要であると考えられる。

## VII. 結論

入院中には【児が入院したことに罪悪感・寂しさを感じる】【分娩が大変だったと振り返り、まだ体調が万全ではないと感じる】【母乳分泌量増加を実感する】【児が元気になっている様子を見たり哺乳量が増加していることが励みになる】、【周囲の存在が搾乳への原動力となる】【児の哺乳量に見合う搾乳をとどけなければならぬという使命感】【よりよい搾乳方法を模索する】【退院後の搾乳について思いをめぐらせる】等の思いを感じている。

退院後には【乳房の張りや乳汁分泌量の変化を感じ取り対処しようとする】【搾乳という行為を継続することで生じる身体的・経済的負担】【母乳継続に良い事をしようとするが継続が難しく、出来ていないことに罪悪感を感じる】【搾乳に自信が持てず児が退院した後の授乳を生活に思う】【児に母乳を飲んでもらいたいという気持ちがあり、児の哺乳量に見合う搾乳量となるよう努力する】【搾乳中心の生活となる】【家族からの支援があることをありがたく思う一方で気を使う面もある】【搾乳量減少への対処として、NICUで児と接触したり、産科入院中に助産師に助言されたことを思い出し実践する】などの思いを感じていた。

搾乳を行う母親は緊急帝王切開や児の入院

という劇的な変化を経験する。その中で様々な思いにぶつかりながらも、児の成長を感じ取ったり周囲の支援を受けて搾乳に励んでいた。長期的に搾乳を行う中で相談できる場が少なく、育児への自信喪失へつながる可能性がある。搾乳量だけで評価せず搾乳という行為に対する努力を認めることで、育児への自信につなげることが重要である。また母親が孤独感を感じないように、産科・小児科で密な情報共有を行うなど継続的に寄り添うことが重要である。

## VIII. 研究の限界

本研究は対象者が3名であり、また当院新生児室では在胎週数34週未満の新生児は対象としていないことから今回の結果をそのまま一般化することは難しい。また対象者のうち1名は児が大学病院へ搬送となり背景が異なっていた。今後はさまざまな背景の対象者での質的研究をすすめていくとともに量的研究も必要と考える。さらに、今回の研究では産科スタッフがインタビューを行ったが、新生児治療室スタッフからの情報を研究結果に活用し母親の心理をより深く理解する研究が必要と考える。

## IX. おわりに

本研究に結果は、長期搾乳を行う母親の心理を理解する一助となり今後のケアにつながると考えます。本研究に協力していただいた方々に心から感謝いたします。

### <参考文献>

- 1) 遠藤俊子：ハイリスク妊産婦・新生児へのケア 日本看護協会出版会 p258 2009
- 2) 大山牧子：NICUスタッフのための母乳育児支援ハンドブック第2版第1刷 メディア出版大阪 p7-50 2010
- 3) 内海由樹：早期産となり長期搾乳を必要とした母親への母乳育児支援—退院後の搾乳の実態からの検討— 長崎県母子衛生学会誌第10巻 p15-19 2008
- 4) 江南宣子：NICUにおける母乳育児支援の効果—母親たちの声から学んだこころのケア— Presented by Medical Online p55-59
- 5) 大山牧子：NICUにおける母乳育児支援 Neonatal Care vol.22 no.11 p89-95 2009
- 6) 高橋斉子：早産児の長期搾乳を継続する過程で直面する困難と搾乳継続を支えた要因 日本母性看護学会誌 Vol. 12 No.1 2012